上演③　尾北高校「SAKHALIN」

　戦争を知らない、知識としては知っていても肌感覚としては知らない高校生。電話交換手などという存在さえ知らないであろう現代の高校生が、戦時下の日常、身に迫る戦争の恐怖、青酸カリで自ら選ぶ死。それぞれの感情を演じるには相当の努力が必要だったことであろう。が、キャストはしっかりと演じ切っていた。そしてその熱量に圧倒された。演技よし、等身大の表現よし、スタッフワークよしの演劇であった。

　工夫できそうな箇所をいくつか挙げる。定時連絡の時のミツと智恵子のなにげない会話やお汁粉を囲む場面などは、若い女性のにぎやかさ、和やかな雰囲気がもっと楽しげに演じられたら、戦争の重苦しさがより際立ったのではないか。豊原と真岡の位置関係はあれでよかったのか。ラストシーンでミツは階段上に立っていたのだから、階段上に豊岡があってもよかったのではないか。ただ上は死者の昇天の場として描かれているので、あの位置になったのであろうが…。

　その死者の扱いに関しては審査員会で一番の話題となった。舞台中央が開き階段が現れ、死んだ者一人一人がそこを登っていき、現世に未練を残しつつ昇天する。そのように表現されていたように思うが、死者はそのまま舞台上に残したほうがよかったのではないか。服毒自殺は一種の集団パニックだから、その場に死体があったほうがリアリティが出る。目を背けたいものをそのまま見せるほうよいのではないか。また、死んだと思われた健児が生きていた表現も、死体が残る中、生きていたほうがより強いコントラストとなったのではないか。など、様々な意見がでた。

　戦争を知らない我々にとっても、今や戦争は身近な話題である。ロシアのウクライナ侵攻。イスラエルとハマスの武力衝突。その戦争で民間人が犠牲になっていることを忘れてはいけない。平和なこの日本で、今、この作品に真っ向から取り組んだ尾北高校に拍手。